小田切秀雄

社会文学・社会主義文学研究

小田切秀雄

社会文学・社会主義文学研究

江苏工业学院图书馆
藏书章

勁草書房

著者略歴

1916年　東京大井町に生る
1941年　法政大学法文学部国文科卒業
専　攻―近代文学
現　在―法政大学名誉教授
著　書―『万葉の伝統』（講談社）
『文学的立場と政治的立場』（筑摩書房）
『二葉亭四迷』（岩波新書）
『著作集全七巻』（法政大学出版局）
『現代文学史』上・下（集英社）
『文学概論』（勁草書房）

社会文学・社会主義文学研究

1990年1月20日　第1版第1刷発行

©著者　小田切秀雄（おだぎりひでお）
発行者　石橋雄二

発行所　株式会社　勁草書房（けいそう）
112 東京都文京区後楽 2-23-15 振替／東京 5-175253
電　話（編集）03-815-5277（営業）03-814-6861

＊落丁・乱丁本はお取りかえいたします。
＊定価はカバーに表示してあります。
＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

根田印刷・牧製本
Printed in Japan

ISBN4-326-80024-0

はじめに

この書は、社会文学・社会主義文学に関してわたしの書いたものを、やや系統的に集めて一巻にしたものである。ただし、既刊のわたしの本に収めたものは原則として再録しなかったが、それらについては、本書の諸論文のなかで大体のところは知られるようになっている。再録は、森鷗外と官僚主義との関係を論じたものその他、必要な最少限にとどめた。なお、この一巻での対象は、敗戦までに一応限定してある（多少の例外はあるが）。戦後に関してもやがてはまとめねばならぬが、現在のところまだ書くべくして書いていないところが少なくない。

社会文学、ということばには、わたしはなんとなくなじみにくいものを感じている。もともとジャンルとしての社会文学などというものはないし、社会小説とか社会詩とかという言い方もまったく便宜的なものにすぎない（明治三〇年代前半の〝社会小説〟のように、文学史的概念としてほぼ認められているものまでをあらためて否定するというつもりはないが、それが不毛のままで明治三〇年代の後半に入らぬうちに終わってしまったことは、〝社会小説〟という概念そのものがアイマイなものにすぎなかったことに関連している）。敗戦直後、といっても一九四八年ごろ、平野謙が中央公論社からの依頼で一〇巻ほどの「社会文学全集」を編むことになり、わたしと二人で編集したいというので、わたしは一応承諾の返事をし、中央公論社の編集者とも会ったが、さて心が生き生きと動きだすというふうにはならなかった。プロレタリア文学から菊池寛あたりまでをふくむところの、漠然と社会的素材ないし社会意識にかかわりのある作品のすべてを〝社会文学〟とするというのだったが、その当時の社会主義文学の上げ潮（そのころ

はまだ敗戦直後からの一時の高揚が一応のところ続いていた。その当時は民主主義文学という形で）の時代的な空気のなかでは、右のような〝社会文学〟などにはどれだけも熱意をもつことができず、わたしがそんなふうだったからというだけではないが、とにかく計画はすこしも進まず、結局立ち消えになってしまったことがある。いま、敗戦後四〇年余にして時代思潮も空気も変わり、文学の関心は社会的素材や社会意識から離れた内向性や性や虚無や風俗等に向かい、それに甘んじえない人びとは、右のような意味での社会文学そのものにかえって熱い関心をよせるようになった。近年結成された社会文学会がさかんに活動しているのは、その現れの一つである。わたしが本書に〝社会文学〟の名称を用いたのはそのためだが、さてそのことでこの概念のアイマイさがなくなったわけではないし、わたしのなじみにくい感じが消えたわけでもない。しかしアイマイだということは、実にさまざまなものをすべてこの概念のなかに漠然と包括してしまうことが可能だということでもあり、社会的な素材をとりあげた作品、社会的関心ないし社会的自覚をもち、またはそれを中心とした作品、これらをすべて社会文学という言い方で包括するのは便利ではある。わたしはこの便利さに従うことにしたのであって、それ以上ではない。

社会主義文学というのは、もちろんプロレタリア文学のすべてをもふくむけれども、それですべて終わるというものでなく、広義の社会主義の立場とその内面性とにかかわるすべての文学を包括するいわばより高次な普遍的な概念である。プロレタリア文学ということばは、本書のなかでややくわしくのべてあるように、まさに一時期の歴史的概念であって、日本においての社会主義文学の一九二〇～三〇年代の独自な形態をさしていう。プロレタリア文学ということばが敗戦とともに文学運動上のことばとしてはまったく死語になって、だれもが戦後の文学についてはこのことばを使わなくなったのは以上のような理由による。社会主義文学ということばは、明治のいわゆる〝社会主義文学〟、大正初年の〝労働文学〟の一部、昭和初年の〝プロレタリア文学〟、戦後の〝民主主義文学〟のうちの革命的部分、等のすべてをふくむことばであり、諸外国での同じ傾向の文学潮流・作品群と対応している。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

かつてわたしは、明治いらいの日本近代文学史の底部また深部を流れるところの〝人民的・革命的文学動向〟ということばを使って、これにふさわしい内容の作品の歴史的脈絡を明らかにしようとしたことがあるが、文学史についての全体とその底部・深部という把握の仕方はいまなお誤っていないと思うものの、これでは、人民的・革命的ではないが社会的ではあるという多くの場合を日本近代文学史のなかから排除してしまうことになる、という点で狭すぎる概念であり、その意味でも社会文学的動向というまったく包括的な便利な言い方には従わざるをえないということもある。

なお、現在の社会文学研究・社会主義文学研究のうちには、潮流に関しても個々の作家・作品に関しても、わたしがそのいとぐちをつくったものが必ずしも少なくない（〝ナップの眼鏡をはずせ〟という提唱いらい。わたしの集英社刊『私の見た昭和の思想と文学の五十年』に略述）。本書はいくらかそれを記念する意味あいをもっていないわけではない。また、わたしは社会文学・社会主義文学を、それじたいとして検討するだけでなく、たえず日本近代文学史の全体のなかにすえて、その関係位置の測定や評価を行なう、ということにつとめてきた。本書の諸論文のならべ方のうちにも多少はそのことが現れているかと思う。

本書も（『文学概論』いらい）勁草書房の磯崎好子氏の世話になった。

一九八九年八月末

著　者

社会文学・社会主義文学研究　目次

はじめに……i
① 二葉亭四迷――(一)〝人生の全般的考察〟……3
(二)二葉亭の〝社会主義〟とナショナリズム……6
② 北村透谷――わたしの透谷……15
③ 樋口一葉――女性作家の職業的自立……20
④ 内田魯庵――明治知識人の一典型としての魯庵……25
⑤ 田岡嶺雲――嶺雲評価史上の「暗黒期」のなかで……39
⑥ 国木田独歩――『運命』の作品構造においての自我と民衆……43
⑦ 大塚甲山――埋もれた反戦詩人……53
⑧ 石川啄木――その小説・随筆のおもしろさ……65
⑨ 森鷗外――かれと官僚主義……75
⑩ 長塚節――『土』――自然文学・自然主義文学・自己をこえる文学……80
⑪ 荒畑寒村――社会主義者の魂の純粋……95

⑫ 田村俊子――その三回の復活、文学史・女性史上の位置 …… 98
⑬ 永井荷風――『花火』の反絶対主義 …… 106
⑭ 有島武郎――「有島日記」での徹底した自己追及から …… 111
⑮ 沖野岩三郎――革命派の牧師作家 …… 115
⑯ 平沢計七――解放の〝巨人〟を求めた労働文学作家 …… 128
⑰ 葉山嘉樹――最初の〝現代作家〟 …… 132
⑱ 黒島伝治――じみな〝大能〟の作家、その全集の実現 …… 140
⑲ 広津和郎――かれの昭和期の評論の位置と重み …… 158
⑳ 小林多喜二――『小林多喜二問題』追補 …… 168
㉑ 中野重治――『甲乙丙丁』・中野重治の新しい意味 …… 176
㉒ 窪川鶴次郎――その一巻本の代表的評論集を編むに当って …… 194
㉓ 平野　謙――生の危機のなかで …… 209

㉔ 舟橋聖一――かれの反軍国主義……219
㉕ 小熊秀雄――ヒョウヒョウとした大詩人……222
㉖ 野上弥生子――『迷路』の若々しい冒険……232
㉗ 壺井　榮――ゆたかな、非文壇的な作家……235
㉘ 石川　淳――その底力の一つ……245
㉙ 世界および日本のプロレタリア文学概観……252
一 〝プロレタリア文学〟という概念（世界文学史および日本文学史においての）……252
二 世界各国におけるプロレタリア文学の発展……255
三 日本のプロレタリア文学……268
㉚ 『近代社会主義文学集』について……281
㉛ 現代文学においての『文戦派』の意義……321
人名および著者・論文索引……巻末

社会文学·社会主義文学研究

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

二葉亭四迷

(一) 〃人生の全般的考察〃

二葉亭の一九〇七年前後のものと見られる未完の談話草稿（といってもいまは二葉亭の全集で見ることができるのだが）に、『露国文学の日本文学に及ぼしたる影響』という評論があって、短いものだが実に多くの手ごたえ重い問題をふくんでいる。そのなかに、

所が露西亜の作家はさうでなかつた、真面目に人生問題の全般に亙つて考究した、であるから日本文学者のやうに、文学一点張りで他方面の事は関せず焉で居たのではない、又実際に当時の露国政府は、何をいふにも頑迷で暴逆であつたのだから、甚しい圧迫を国民に加へた、……

という一節があって、一九世紀のロシア作家たちが真正直に〃人生問題の全般に亙つて考究〃したことを指摘している。これは当時の日本文学に向っての批判としてもちだされていて、〃当今の日本の作家は、或は人生問題に接触して、その根本意義を解さうと努めては居るけれども、人生の或る一部を以て、全般に亙らうとして居る風がある、未

だ遊び半分に著作に従事して居る傾きがある。ツルゲネフ時代の作家に比しては、不真面目である〃、といっている。この日本文学批判はやや不用意に粗っぽく書かれているようで（それで未完の草稿なのだろう）、〃遊び半分〃というのも、直接には小栗風葉や小杉天外の長編がもてはやされていた自然主義前派の文学のことをいうのかどうか、よくわからない。しかし、〃人生問題の全般に亙って考究〃という一九世紀ロシア文学の基本的な特色に、多少とも相通ずるものをもった作家を日本近代に求めれば、もともとそういう作家はきわめて少ないなかでこの二葉亭こそがまず第一にとりあげられることになろう。かれは『小説総論』の時からすでにそういう傾向を見せてはいたが、『浮雲』がもっぱらその全般的考察の意図で着手され、かなりのていどまで実際にそれを実現していることは、作品じたいからも知られる通りだし、二葉亭自身が『作家苦心談』という談話のなかで具体的に語ってもいる。

ところがこの作家は、その後、自身のはじめた〃人生の全般的考察〃から後退してゆくばかりなのだが、その後退のなかに、屈折し萎縮した形で〃人生の全般的考察〃の見識や関心やが生き続けていた、というのが実情である。これを具体的にいえば、すでに『浮雲』じたいのなかで、第三編になると、〃新思想と旧思想との対立〃等の人間関係の追及の代わりに、苦悩する主人公文三の自我の姿ばかりが執拗に描かれるようになってしまうのだが、そういう形で近代人間の疎外された心理を深くとらえることに成功してはいるのである。また、二〇年近くの歳月ののちに書かれた第二作『其面影』の場合、主人公哲也は『浮雲』の文三よりはるかに消極的で、同じく『浮雲』の昇の後身といっていい葉村から、のっけからきめつけられる。〃君は其様な事いふけど、まあ考へて見給へ、理想た何だ？ 古本の精ぢやないか〃、〃其様な古本の精なんぞに取憑れて、目を開いて始終夢を見てるもんだから、君は、お気の毒ながら、最う死んでますよ。理想は生ながら人を殺すから、何が恐ろしいと云って、是程恐ろしい者は世の中にない〃。これにたいしてわが主人公は何もいえない。末尾に近いところで、その葉村が哲也に向って、〃君が意気地がないからだ〃、と断定すると、酒に酔ってではあるが〃「さうだ！」とびしやりと我手で我膝を撃って、「夫に違ひない！ 僕は全く

意気地がないのだ」と又ぐたりとなつて首を掉る〃。自分でみとめてしまう始末だから、このような主人公をめぐってでは作中に生じうる文学的な緊張した人間関係も、きわめて限られた狭い関係――家着のひどい妻時子およびその母への嫌厭と気の毒な小夜子への同情と愛とで動きながら、その弱さのためにすべてのひとを不幸にしてしまう、というような事がらの範囲にとどまっている。これでは〃人生の全般的考察〃からはだいぶ離れていることを、否定することができない。しかし、この作品の全体に一種沈痛の趣きがあって、主人公の苦悩や愛がまったく不毛な、絶望的なものとされていることのうちには、『浮雲』の文三いらい二〇年近く二葉亭が抱き続けてきたただひとつの人間像としての確かな実感的な裏づけがあり、そういう人間像をきざむということは、それなりに〃人生の全般的考察〃のひとつにはなっている。

明らかに後退しながら、しかもやはり〃人生の全般的考察〃にどこかで執拗につながっている、というみょうな関係は、最後の小説となった『平凡』にも一層あらわな形で見出される。この第三作の主人公は小説家で、当時の自然主義作家を諷するという以上にまったく卑小な人物として設定されており、それは文学にたいして作者が抱くようになっていた深い懐疑とも結びついているのだが、その卑小な主人公の自伝的な半生の叙述は自然主義小説のパロディにもならない。そういう小説なのだが、このなかには例の〃ポチ〃をめぐる一節があり、そのほかいくつかのきわめて印象的な部分がある。ポチの部分の内容と表現のみごとさはまったく類の少ないもので、動物との無償・無垢の愛の交流がこれほどあざやかに描かれた例は日本にはない。それはやがて、およそこういう純粋なものとは違った人間たちの愛の現実への、深い絶望を伴ったせつない思いが、生きいきと作者を動かしてこの部分の表現を可能にしたということを知らせずにはいない。ところで、この作品のうちの印象的な部分の一つに、こういうところがある。〃惚れては居たが、夫だから雪江さんを如何しやうといふ気はなかつた。其時分は私もまだ初心だつたから、正直に女に惚れるのは男児の恥辱と心得てゐた。女を弄ぶのは何故だか左程の罪悪とも思つて居なかつたが、苟も男児たる者

が女なんぞに惚れて性根を失ふなどゝ、そんな腐つた、そんなやくざな根性で何が出来ると息巻いてゐた。が、口で息巻く程には心で思つてゐなかつたから、自分もいつか其程に擯斥する恋に囚はれて了つたのだが、流石に囚はれたのを恥て、明かに然うと自認し得なかつた気味がある〃。女性との関係で、明治期の男たちにおいての最もありふれた態度といえばまさにこれだが、批評的にはっきりとその仕組みがとらえられていておもしろい。ほかにも印象的な場面をいくつかあげることができるが、とにかくこの『平凡』は〃人生問題の全般に亙つての考究〃からはだいぶ後退しているものの、部分的にはかえってそういう〃考究〃が生動しているところがなくはない。

さきの『露国文学の日本文学に及ぼしたる影響』のなかには、次のような一節までがふくまれている。〃小説一篇の為めに断頭台の露と消えた人もあらう、詩一章歌一首の為めに西比利亜へ追放された者もあつた。……中にも過激な人達は爆裂弾を抱いて起つた、国民を自覚させやうと筆を鉾にした、筆と爆裂弾とは一歩の相違があるばかりであつた〃。作家としての二葉亭は後退ばかりしていたのでもなかった。かれの存在は、〃人生問題の全般に亙る考究〃と、それの可能性の問題をめぐっての文学そのものへの深い懐疑とによって、明治いらいの日本の作家たちのなかでこんにちなお屹立しているのである。

(二) 二葉亭の〃社会主義〃とナショナリズム

〃官吏の境涯は奴隷の境涯なりとて、之を悪むこと蛇蝎の如くなりし者が、一朝聊かの生活上の困難に遭遇してベッたりとくずれていつしかその奴隷に均しき官吏になつて了ふ〃――こういう脱落者たちもあった、と二葉亭は一九世紀ロシア・インテリゲンツィアを論じた一九〇四年三月の『露西亜の婦人界』でのべている。この評論は『女学世

界』という若い女性向けの雑誌に発表され、題目通りにロシアの婦人たちの歴史にも触れているが、主として一九世紀ロシアの知識階級、いわゆる〝インテリゲンツィア〟の問題と歴史とを、いまなお新鮮な深い理解および共感によって概観したものである。そのうちの、脱落者についての説明のなかに右のようなことばがあった。

しかし、それなら、一五年前の二葉亭自身はどうだったのか？　〝露西亜の官吏がひどく嫌いであつた、其の感情を日本のに応用〟して（『作家苦心談』）書いたという『浮雲』を中途で放棄して内閣官報局に入り、つまり日本の官吏になってしまったのは、二葉亭自身ではなかったか？　いささかの困難に遭遇してべッたりくずれ、云々というのは、なにもひとさまのことばかりではなかったではないか？　――この『露西亜の婦人界』という評論では二葉亭は、自身の傷あとのことには触れていない。しかし、作家として生きることへの絶望として現われた一八八九年のかれ自身の敗退・脱落の手痛い経験は、そのごの二葉亭の生涯と文学をさまざまな仕方で規定し、自覚的また無自覚的にかれの仕事と行動の内部で生きていた。文学だけについていっても、かれは島崎藤村や田山花袋らをふくめて明治四〇年代の自然主義文学が、文学をも実生活をも素朴に信用しもたれかかっているというまさにそのことにたいして、小説『平凡』その他で鋭く見事な批判を行ないながら、その批判が自己に向けられての深い懐疑によって自身も文学にうちこむことができず、書くのにひどい苦労をかさねてしかもいじけたところのある作品になったのであった。そこにまたかれの小説の独特なおもしろさや、文壇的な文学のもつへだてをこえて多くの読者に直接にしたしまれるなつかしさも生れたのだが。

さきにのべたようなひどい苦悩のはてに、敗退してかれが入った内閣官報局が、明治の官僚体系のなかで、ここだけおよそ官僚主義と縁のない別天地のようなところであったということは、かれにとってとにかく一つの救いであり、悪戦苦闘のはてのかれの敗退をいたましく思うわたしたちにとってもせめてもの救いである。この就職をあっせんした外語時代の旧師古川常一郎からして、内田魯庵の『二葉亭の一生』（追悼文集巻末）によると、公爵伊藤博文と浅か

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com